

編集・発行：三重県生活・文化部 新博物館整備推進室

ともに考え、活動し、成長する博物館にむけて

展示設計がまとまりました

…P1

基本展示室の紹介
・みなさんとともに収集する写真

…P2

・三重の名が付いたミエソウ

…P2

・にぎわう伊勢湾

…P3

・一生に一度の夢のようなもてなし

…P3

建築設計が完成し、工事が始まりました

…P4

ゾウが歩いていたころの鈴鹿を探る

…P5

おとなになっても残しておきたい地域の宝・魅力をさがし出そう！

…P6

新博物館の展示が先に松阪にやってきました！

…P7

お知らせ …P8

県民・利用者との協創、多様な主体との連携により、三重の資産の保全・継承と活用、人づくりや地域づくりへの貢献をめざします。

新県立博物館の展示設計がまとまりました

平成26(2014)年の開館をめざして、整備をすすめている新県立博物館の展示設計がまとまりました。新県立博物館では、三重の自然と歴史・文化に関する資産の保全・継承と活用、人づくりや地域づくりへの貢献を使命とし、調査研究・収集保存・活用発信の3つの基本的な活動を県民・利用者みなさんとともに進めていきます。

このため、今回とりまとめた展示設計では、展示エリアだけでなく、県民・利用者みなさんが訪れ、活用されるエントランスエリア・交流創造エリア、そして、ミュージアムフィールドなどの敷地全体も設計対象としました。

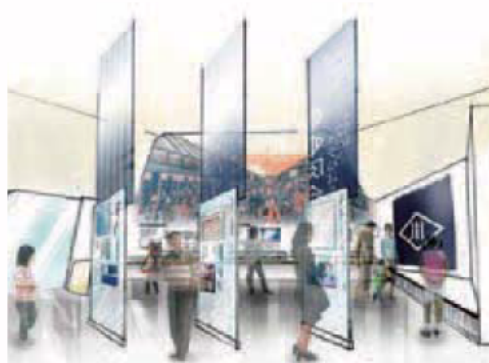
なかでも、展示エリアでは、常設の基本展示室はコンパクトな構成とし、多様で多彩な複数の企画展示を展開できる広いテーマ展示室を設けたこと、また、みなさんが主体的に活動し、交流できる交流創造エリアを設けたことなどが特色です。(新博物館ニュース第4号を参照ください：<http://www.pref.mie.jp/SHINHAKU/HP/info/>)

展示設計にあたっては、次の3点を基本としました。

- 三重の自然と歴史・文化のことがわかる展示
- みんなで一緒につくっていく展示
- 子どもたちを育む展示

特に基本展示室では、約800㎡の空間の中で、三重の多様で豊かな自然とそれを背景に展開した三重の歴史・文化を総合的に紹介するため、三重の大地のなりたちなどを導入とし、展示室の周囲には三重の特色ある4つの自然を展示するとともに、その中央に三重を舞台とした人・モノ・文化の交流の歴史を展示します。さらに、それらの間には、4つの地域における人のくらしと自然との関わりを考えるコーナーを配置しています。

基本展示室のコーナーイメージ



交流のかたち～モノの交流



大杉谷・大台ヶ原の自然

今回の新県立博物館ニュースでは、この基本展示室のエッセンスを紹介します。今後、基本展示室の個々のコーナーの魅力や、基本展示室以外の見どころなども順次、紹介していきますので、ご期待ください。

基本展示室の紹介

基本展示室の各コーナーについて、その一部を紹介します。次号以降も各コーナーについて順次紹介していきます。

くらしと自然のコーナーから

わたしたちのくらしは自然環境に影響されます。また、人の手が加わることで自然も変化します。人びとが自然と関わり合いながら特色あるくらしを育んできたことに着目し、三重の山・盆地・平野・磯の4つの地域におけるくらしをとりあげて紹介することで、自然分野と人文分野との総合展示をめざします。

みなさんとともに収集する写真

土地の利用や農作業に使われている道具、作業をしている男性の格好から表情まで詳細に見てとれます。新県立博物館では、こうした一枚の写真が持つ多様な情報を生かし、県民・利用者のみならず、県外にも収集した写真を自由に閲覧できる場を設けます。来館者の方々が展示を身近なものと感じ、これから先のくらしと自然の関わりを考える機会としていただけたらと思います。

写真からくらしを感じる

くらしと自然の写真の好例として、伊勢平野で撮影された右の写真をご覧ください。当時の情景からは、



ひと昔前の農作業の様子

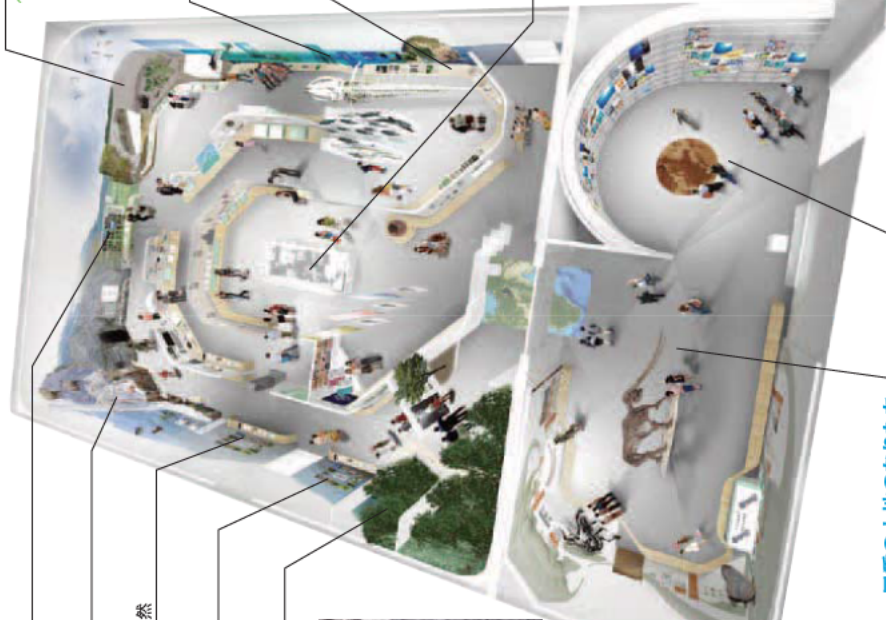
平野のくらしと自然

～伊勢平野～
鈴鹿山脈の自然
～カモシカのすかし山～
盆地のくらしと自然
～伊勢盆地～
山のくらしと自然
～大台・東紀州～
大杉谷・大台ヶ原の自然
～多雨が変える森～

伊勢湾の自然

～遠浅の広い海～
磯のくらしと自然
～志摩・東紀州～
東紀州・熊野灘の自然
～黒潮はせる豊かな海～

三重をめぐる人・モノ・文化の交流史



三重の大地のなりたち

ただ、太古の生きものたちが眠っています。これらもみなさんとともに新たな発見をめざし、未来に伝えていきたいと思えます。



ミエゾウ北黒田蔵本

に巨大なミエゾウの顎の化石(写真)が発見されました。その後も、県内各地から情報がよせられ、貴重な化石が見つかっていきます。

全身骨格復元

交流創造エリアでは、ミエゾウの全身骨格を復元する予定で、新博物館の展示の目玉のひとつとなると考えています。わたしたちの足元には、

三重の名が付いたミエゾウ

「ミエゾウ」は、津市芸濃町の明小中学校の近くで発見された標本に世界中で通用する学名を「*Stegodon miensis* (ステゴドン・ミエンジス)」と三重の名が付けられた絶滅した巨大なゾウです。昭和30(1955)年には、津市(旧河芸町)北黒田の長池のほとり、地元の方に

よって、道を広げる作業中

三重の多様で豊かな自然コーナーから

三重は南北に長く、雪がよく降る鈴鹿山脈もあれば、温暖な東紀州沿岸もあります。標高1695mの大台ヶ原山から水深2000mの熊野灘までの高低差があり、また、遠浅の広い内湾である伊勢湾など、日本一の縮図といえる多様な生態系があることがこのコーナーでとり上げるとり上げられます。

にぎわう伊勢湾

伊勢湾の豊かな生態系

伊勢湾には、河口の汽水域、コン原、干潟、砂浜、アマモ場、遠浅の水域などの多様な景観が見られます。さらに、最大17mにも達する潮の干満によってさまざまな環境がつけられ、そこには、多様な生きものがくらしています。特に、潮が遠くまで引いた大きな干潟では、生きものたちの営みが繰り返られていくことが簡単に観察できます。これらの営みは海を美しく、わたしたちに多くの恵みを与えてくれます。

伊勢湾と人との関わりの変化

さらに、伊勢湾は人の生活の影響を受けやすいことから、今と昔の伊勢湾の関わり方を紹介し、これらの伊勢湾とのつながりを考えるきっかけになればと思います。



潮が遠くまで引いた松名海岸の干潟

三重をめぐる人・モノ・文化の交流史のコーナーから

三重の地は東西交流の結節点として、古来より人・モノ・文化の交流が盛んなところでした。歴史・文化の展示では、「交流」をキーワードに、「三重のすてさ」を紹介します。

一生に一度の夢のようなもの

いわれています。このような参宮者の宿泊や案内、祈禱などの世話をうける伊勢参りの大流行でしよう。「一生に一度は伊勢参り」と言われ、最盛期には年間100万人前後、日本の全人口のおよそ20人に1人が訪れたと

全国から訪れた伊勢

三重をめぐる交流史のピークといえは、近世(江戸時代)における伊勢参りの大流行でしよう。「一生に一度は伊勢参り」と言われ、最盛期には年間100万人前後、日本の全人口のおよそ20人に1人が訪れたと



御師屋敷での神楽の様子(伊勢参宮名所図会)

三重への招待

～三重はこんなところ～

三重の大地の大発見!

「ミエゾウ」は、津市芸濃町の明小中学校の近くで発見された標本に世界中で通用する学名を「*Stegodon miensis* (ステゴドン・ミエンジス)」と三重の名が付けられた絶滅した巨大なゾウです。昭和30(1955)年には、津市(旧河芸町)北黒田の長池のほとり、地元の方に

よって、道を広げる作業中

建築設計が完成し、工事が始まりました

建築設計は平成22年5月20日に、造成工事は12月15日にそれぞれ完了し、建築工事は平成23年1月に始まる予定です。

建築設計の完了

建築設計については、平成21年6月の概略設計の公表以来、県民のみならず県議会の意見をお聴きしながら設計を進め、平成22年5月20日に完了しました。

造成工事の完了

平成22年6月3日に三重県土地開発公社と施工者が契約し、敷地の造成工事が始まりました。敷地の高さを整備するための土の掘削や、地下調整池の設置・竹林の伐採などを行い、12月15日に工事が完了しました。

建築工事の開始

造成工事終了にひきつづき、いよいよ建築工事が始まります。建築工事、設備工事などの各施工者と平成22年11月30日に契約を結び、工期は平成25年度当初までとなっています。さらに今後、別途外構工事なども発注する予定です。

建築工事を進めるにあたり、周辺住民の方への影響や、安全に配慮しながら工事を進めていきます。また、施工段階で詳細な使い勝手などについて、ユニバーサルデザインに関する意見交換なども行っていきます。



新博物館完成予想模型



新博物館完成予想図



平成22(2010)年11月末の新博物館建設予定地の状況（造成工事中）



新博物館建設予定地に見られる地層

建設予定地の地層

新博物館建設予定地の下には、ミエゾウの化石が産出したところと同じ、東海層群亀山層という地層があります。亀山層は、津市、亀山市、鈴鹿市に広く分布する400万～300万年前ごろの地層です。主に河川によって運ばれた砂や粘土が交互に積み、ところどころに火山灰層が挟まれています。

造成工事中に亀山層が現れました。左の写真のように地層の重なり方がよく見えています。工事中しか見られないこの地層の写真撮影を行い、一部を剥ぎ取って保存するなど、建築工事により埋まってしまう前に記録として残します。

ゾウが歩いていたころの鈴鹿を探る —御幣川ゾウ足跡化石調査—

現県立博物館では、鈴鹿市を流れる御幣川（おんべがわ）でゾウの足跡化石が発見されたことを契機に、ミエゾウをはじめとするゾウ研究の基礎資料を得ることを目的として、昨年度から足跡化石を含む地質総合調査を行っています。



調査の様子

今年度は8月26日～29日に、滋賀県足跡化石研究会・金城学院大学・京都教育大学の先生や地元自治会など、さまざまな方々と協働・連携して調査を行いました。この調査は、新博物館がめざす「協創」と「連携」の先駆的な取り組みとして位置づけており、今後も多くの方々や大学などと連携し、まだまだ解明されていない三重の大地のなりたちを調査・研究し、三重の貴重な自然遺産の保全につなげていきたいと考えています。

太古の資料庫

新博物館の展示の目玉のひとつであるミエゾウは、島国で小型化し、アケボノゾウへと進化し、その後絶滅したと考えられています。現博物館では、ミエゾウとその子孫が歩んできた過程を解明し、絶滅した理由を探るための調査、資料収集を行っています。

御幣川だけでなく、三重の大地は、過去の気候を教えてくれる生きものの化

石や、地層から読み取れる川の流れ方など、さまざまな情報が眠った“太古の資料庫”といえるものです。この膨大な資料庫から、重要な資料や情報を引き出して新博物館に収蔵・展示する予定です。

氷期のはじまりを記録する鈴鹿の調査

約260万年前、地球は寒冷化し氷河が発達し始めました。それ以前は、現在よりもはるかに暖かい気

候でした。鈴鹿市の伊船地域は、この時代の自然環境の変化を記録した地層が連続的に残っている全国的にも貴重な場所です。今回、この時代を探るために次の調査をしました。

①足跡化石の調査：太古の生きものがどのように生きていたかを解明するため、足跡化石の形態を解析したところ、ゾウやワニと思われる足跡が確認できました。

②地層の調査：古環境の変化について時代を追って解明するため、地層の重なり方等を調べました。

③太古の自然環境の調査：植物や昆虫や貝などのさまざまな化石から当時の自然環境を調べました。

これからも、各調査の成果を総合し、当時の自然環境の中で生息していた生きものの状況を調べていきます。



偶蹄類（シカのなかま）の足跡の化石



地層の調査



調査報告会

調査報告会

10月3日(日)には、これまでの足跡・貝・昆虫などの化石と地層に関する調査をまとめた報告会を地元の鈴峰公民館で開催しました。参加された研究者らが、これまでの調査で、わずか50cmほどの高さの違いで、熱帯性から寒冷地性の昆虫を含む地層

に変化し、この間に気候が急変したと推定されることなどを報告しました。

今後も調査の内容をお知らせし、みなさんが郷土の土地のなりたちに関心を持っていただき、遠い過去から未来の地球のことを考える糧としていただければと思います。

おとなになっても残しておきたい地域の宝・魅力をさがし出そう！ —新博ティーンズプロジェクト—

「新博ティーンズプロジェクト」って？

昨年度から行っている子どもたちが主役の博物館づくりのための取り組みです。今回は、家族や友だち、学校のサークルなどのグループで「おとなになっても残しておきたい地域の宝・魅力さがし」を行いました。これらの活動を通して、博物館の活動に興味や関心を持ったり、自分たちの住む地域について知ってもらうきっかけとなればと企画しました。



参加を呼びかけるフライヤー

説明会と調査

7月11日（日）、まず、調査方法についての説明会を行いました。この取り組みや新しい博物館についての説明を聞いた後、グループごとに担当する学芸員と一緒に、何を・どうやって調査するのかなどについて相談しました。テーマは下記の表のとおりです。

調査は、ほとんどのグ

ループが夏休み中に実施しました。とにかく暑かった今年の夏に、野外を歩くのはとてもきつかったですが、どのグループもとても積極的に取り組み、中には何日もかけて調査したグループもありました。一緒に活動した学芸員たちも、みなさんの熱心さに圧倒されつつ、楽しみながら取り組むことができました。



調査の様子



プロジェクトについて解説する布谷顧問

調査成果発表・交流会

10月17日（日）に、県総合文化センター大会議室で、これらの調査成果発表・交流会を行いました。9グループ66名のみなさんが取り組み成果を発表しました。どのグループの発表も中身が濃いものばかりで、今後も継続して調査していきたいと意欲を見せるグループもたくさんありました。

みんな他のグループの取り組みについても興味津々

で、発表後は「干潟の重要性は？」「そもそも能って何ですか？」「832 軒もしめなわの調査して、大変だったんじゃないですか？」など、お互いに質問し合いました。

新博物館整備推進室の布谷顧問からは、「最初はこれなんだろう？と思って調べ始めたことが、博物館の展示になっていく」ことについて、琵琶湖博物館の展示を例に紹介いただきました。

最後に、生活・文化部の

山口部長から参加者全員に「これからも一緒に活動しま証」を配付しました。

いずれの取り組みも展覧会として十分な内容を持つものなので、ぜひ、新しい博物館の企画展示で紹介していきたいと考えています。

こうした輪がもっともっと広がって、子どもたちにとって新しい博物館がより身近なものになり、仲間と一緒に楽しみながら活用できる施設となることを願っています。



海の調査で採集した標本を紹介するグループ



ポンプの実験をするグループ



「これからも一緒に活動しま証」を受け取るメンバー

グループ名と調査内容 <9グループ66人が参加>

グループ名(人数)	調査したこと	調査地域	グループの構成
6年3人組(4人)	アグリ公園の古い井戸のナツについて	度会郡玉城町	仲良しの友達
三重中学校創作科学部(29人)	海の調査～松名瀬海岸～	松阪市	学校のクラブ
市川family(2人)	津に落とされた焼夷弾	津市	家族
はぎわらさんち(3人)	津にあった昔の能楽堂を中心に「三重県能楽発祥」説の真偽を調べる	津市ほか	家族
NARUMI(6人)	東海道を歩く～鳴海から桑名まで～	名古屋市～桑名市	仲良しの友達
MuMuMu S(5人)	学校を建てる時に発掘された遺跡について	津市	仲良しの友達
四つ葉チーム(5人)	げんかんのしめなわなどの調査	松阪市	仲良しの友達
新博ティーンズプロジェクト2009(6人)	松阪を歩いて昔のことを聞こう	松阪市	昨年度の新博ティーンズプロジェクトのメンバー
チーム尾鷲中学校(6人)	日本家屋を調べよう!～in天満荘～	尾鷲市	仲良しグループ

新博物館の展示が先に松阪にやってきた! —移動展示事業—

移動展示「水の恵みとゆくえ〜くらしと自然の関わりから考えてみよう!〜」を7月17日から8月22日に、松阪市文化財センターで開催しました。今回は、新博物館の基本展示室の「くらしと自然」のコーナーの「平野」の展示案を前もってひろうし、意見をいただきました。



今も残る条里地割の素掘りの土水路



かつての農作業風景



移動展示会場、学芸員による展示解説ツアー



移動展示会場



博物館教室

舞台は櫛田川下流域の伊勢平野

ここには、古代に整備された条里地割の田んぼや素掘りの土水路があります。また、ほとんどが護岸整備されていない河畔林がよく残る小河川の祓川（はらいがわ）もみられます。そこでは「水」の恵みを利用して、古くから人々のくらしが営まれてきました。

今回の移動展示ではその豊かな自然と人のくらしの関係を過去から現在にかけて紹介し、人間が自然に対してこれからどう関わっていくべきかを考えるきっかけになることをめざしました。

展示資料は総合的!

古い農耕具や900年前の洪水の被害状況を伝えた古代の文書、今と昔の航空写真による土地利用の違いや条里遺構の紹介、弥生時代の環濠集落の遺跡から出土した土器、土水路や祓川に生息する生きものの剥製や標本、地域や小学校の環境保全の営み、地域のみなさんと一緒に集めたくらしに関する昔の写真などを複合的に関連させて展示しました。

関連イベントがいっぱい!

フィールドワーク「はらい川たんけん隊」を7月25日に、淡水魚保全シンポジウム三重県明和町大会「水辺へのやさしい関わり方を



河畔林が残る祓川「はらい川たんけん隊」

求めて」を8月5日に、博物館教室「生きものを知ろう!不思議いっぱい」を8月8日に行いました。

シンポジウムは、流域住民や淡水魚保全研究会と一緒に、明和町中央公民館において開催しました。講演や討論のほか、活動ポスター発表や小学生の劇なども行われ、活発な交流がたくさん行われました。

移動展示や関連イベントの参加者からいただいたご意見は、新博物館の展示や活動、運営および来年の1月に桑名市にやってくる移動展示に活かしていきます。ご期待ください。



淡水魚保全シンポジウム朝見小学校のポスター発表



淡水魚保全シンポジウムでの斎宮小学校の発表

展示検討ワークショップ

8月8日のワークショップでは、学芸員による展示解説ツアー、自由討論会を行いました。10名ほどの参加者による白熱した議論が行われました。「展示した昔の写真の内容について、写した方や写された方の解説がほしい!」

といった意見をいただきました。



展示検討ワークショップ

お知らせ

移動展示「くらしの道具 いま・むかし」

「あ〜これこれ!」と「なんだこれ?」の展示会を開催します。

本年度2回目となる移動展示は、桑名市多度町のふるさと多度文学館で開催します。今回は、現博物館が収蔵する資料のうち、平成18年度から実施している移動展示で初めて民俗資料を中心に展示を構成します。ここでは新博物館がめざす、県民や利用者のみなさんとの協創や多様な主体との連携に取り組みます。

展示では、明治時代から昭和30年代頃までのくらしにまつわる道具を紹介し、その形や素材の変化を通じて、便利になった私たちのくらしを振り返るとともに、残していきたい技術や素材、デザインにも目を向けます。

ところで、「昔の道具」といえば、小学3年生が社会科の単元として取り組むものです。そこで今回は、桑名市

多度町内の5つの小学校の3年生のみなさんと協創して展示をつくることになりました。児童のみなさんが、昔の道具についての“調べ学習”を通じて学んだことを、移動展示の展示解説として発表していただきます。

また、現博物館がほとんど所蔵していない、昔のお菓子づくりの道具については、地域のまちかど博物館として認定されている老舗の和菓子屋さんにご協力をいただきます。

さまざまな機関の方々とともに作りあげる移動展示、ぜひご来場いただき、県民の方々の資料を新博物館の展示に活かしていくなど、新博物館がめざす協創と連携のあり方について、みなさんからのご意見をお願いいたします。

日時 平成23年1月22日(土)
～2月20日(日)

9:00～17:00

場所 ふるさと多度文学館
(桑名市多度町多度2丁目24-1)

お問い合わせ 三重県立博物館
TEL: 059-228-2283



研究フォーラム

「子どもが主役となる博物館づくりを考える」

三重県博物館協会と共催して、公開の研究フォーラムを開催します。子どもにとって博物館はどのような場であるべきか、またどのような役割を果たすべきかについて、子どもと博物館をつなぐ先進的な取り組みをされている講師をお招きし、博物館の関係者や博物館活動に関心のあるみなさんとともに考えます。

日時 平成23年1月15日(土)
10:00～16:15

場所 三重県総合文化センター
大研修室

締め切り 1月12日(水)

お問い合わせ・お申し込み先

三重県生活・文化部
新博物館整備推進室

みんなで作る博物館会議

「みんなで作る博物館会議」は、誰もが新博物館の活動に参加し、ともに博物館運営を進めていくためのしくみのひとつとして開催するものです。

新博物館の活動や運営についての検討状況をお知らせして、県民の皆さんが、アイデアや意見などを出し合い、交流できる場としていきます。

日時 平成23年2月13日(日)
13:30～16:00(予定)

場所 三重県総合文化センター
大・中研修室

締め切り 1月28日(金)

お問い合わせ・お申し込み先

三重県生活・文化部
新博物館整備推進室

三重県生活・文化部 新博物館整備推進室

〒514-8570
三重県津市広明町13番地

TEL: 059-224-2175
FAX: 059-224-2408

E-mail
shinhaku@pref.mie.jp

新博物館の情報は、
ホームページからご覧
いただけます。



<http://www.pref.mie.jp/SHINHAKU/HP/>